無題

エイノジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無題

【Ｎコード】
Ｎ７９０３Ｙ

【作者名】
エイノジ

【あらすじ】
８７７ｓｔｒ×毒舌ストレスの話

ハグ→それまでのストレスの１／３に減少。
泣く→平均して４０％のストレスが減少。
よって、誰かに抱き着いて泣いたら１００のストレスが約１３．３
になるという単純計算

無題（８７７設楽×毒舌）

「ていうことだから、ほら」
ソファーに寝転がる俺の隣に立ち、両手を開いて満面の笑みで迎え
入れる体勢の設楽さんを横目にまた雑誌に視線を戻した。
嫌いという訳ではない。ただ、単に、こう…その笑みが腹立つ。
「何。何で来ないの。俺の胸の中で泣けばいいじゃんか」
「気色悪」
その減らず口を捻り潰してやりたい。
奥さんとか子供さんに言えばいいのに、何で俺になんか言っちゃう
かな。
「強気なところがまたいいよね。泣いてる顔見せたくないんでしょ」
設楽さんは俺の手中にある雑誌を奪い取ったりしない。話術だけで
引き込ませることが出来るから。

「涙なんて無いのかな」
顔を覗き込まれ、軽くキスをする。
子供っぽい笑顔に釣られて、何度かちゅ、ちゅ…と繰り返した。
読んでいた雑誌がとことん邪魔で、自分の胸の上に読んでいる頁を

そのままに置いた。
「あ、これ知ってますか？」
自慢の雑学をひけらかされ、俺も一つ紹介することにした。

キスをすると発ガン率が低下するんですって。回数が多ければ多いほど低下する割合は大きくなるみたいですよ。
へぇ…と言って、設楽さんはまたキスをしてきた。
「発ガン予防チュウ…なんつって」
親父ギャグに鳥肌が立った。
他にもたちそうだったけど、そっちは抑えめで…。
「それってさぁ、男同士でも効果あんの？」
「あるみたいですよ。男同士だけじゃなくて女同士もイケる…」
じゃあさあ、と語尾を伸ばして甘えられる。
「俺より有吉の方がガンになりにくいってことかあ」
残念そうとも取れる口調が、真実を語った。
つまりは、設楽さんより俺の方がキスをしている回数が多いと言いたいらしい。
自分なんか仕事でする時ある癖に。
俺は上島さんや肥後さんでさえ、仕事ではしたことないのに。

「チュウだけじゃ物足りなくなってきたね」
「それはアンタだけでしょう」
「ビール取ってきてあげよっか」
「ここ俺ん家なんですけど」

「もーー、何だよぉ。なんかツマンねぇよお」
一体この人は何しに来たんだ。
特に何をする訳でもなくダラダラダラダラと。
いい加減眠くなってきたし、設楽さんの言う通り、少しアルコール入れてから寝るとするか。

「ふわぁあ～…」
「あっ、幸せ逃げる！！」
「…は？」
幸せ？何の話して…
「間違えた！やっぱ今の無し！！」
とんでもねぇところで天然出てきたな。溜め息だろ。
そういうところがあってこその設楽さんだ（無かったら唯のドＳド鬼畜の塊だからな。何も良いところねぇ）。
「じゃ、俺寝ますんで、設楽さんも適当に帰ってくださいね」
「明日早いの？」
「まぁ…１０時くらい」
嘘。
１２時だけど、２時間くらい早めに見積もっとかないと体が持たない。
「ふーん」
「…なんすか」
ヤバイ。
「１０時ね…ねぇ有吉」
いや、察しがついてたから2時間早めに見積もったんだけど。
ちょっとビビっちゃうよね。
「５Ｒくらい大丈夫てことだ」
どこの３７歳が５Ｒ平気なんだよ。死ぬぞ。
「泣き顔見たいなあ」
シャツの下に手を入れ、腹から持ち上げるように手を這わせ、ドＳ王子が降臨する。
「胸触って欲しかったらこれ退けてご覧」
俺は直ぐ様設楽さんの行く手を阻む雑誌を床に投げ捨て、設楽さんを誘い込んだ。
設楽さんの手が俺の左胸を掴んで揉む。
贅肉が集合して、女までとは行かないが、膨らみを見せる。

「…っ」
決して胸で感じることはない。が、設楽さんに、あの設楽さんが俺の胸を触って笑っている（いや、正しくはニヤついている）。
それが興奮材料になって酷く下半身を鋭敏にする。
空いている手でシャツを捲られ、剥き出しになった肌に歯が食い込む。
もう一度確認しておくが、決して胸で感じてる訳ではない。
設楽さんに…
「んア…っ！！」
「すげぇ、とんがってきた」
びちゃびちゃと汚い音を立てながら乳頭をしゃぶられる。
とても上品とは言い難い姿に、触られていないはずの右乳首が熱くなる。
設楽さんの左手の人差し指が右胸の少し上でくるくる回る。
「…？」
訳の分からない動きに戸惑ってると
「触ってもないのに起き上がってきて、こうやったら手品みたいじゃない？」
と。
バカなんじゃねぇかな。
「今日は泣くまで可愛がってあげるからね」
そう言って口を激しく・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7903y/

無題

2011年11月23日16時51分発行